

かつて尾州で商いをしたことがあるという
長屋の住人によると、それは甘蔗というものの苗
らしい。尾張藩における産業発展の大きな鍵を握
る農作物と言われ、甘蔗栽培は奨励されると同時
に、厳しく管理されていたそうだ。庶民には手に入
らない和砂糖の原料だとか。ただ、その男によ
ると、同じ甘蔗でも尾州で見たのとは、色合いと
いい、太さといい、種類が異なるらしい。

弥一郎の表情が、なんとも言えず苦しいもの
に変わった。と、そのとき、突風が唸りを上げて

そう思うと、うらぶれた長屋での、日々の糧に
も事欠くという惨めな暮らしよりも、そのこと
のほうに寂しさを覚えた。そしてすぐに、そんな
ふうに感じた自分に、少なからず驚いて苦笑した。
弥一郎は、町外れの小さな剣術道場で代稽古
を勤めている。と言っても、師範代が留守のとき
に頼まれるだけの仕事で、大した収入になるわ
けではない。

道場は、その地方の豪農の三男坊が、家の近く
で好きな剣術を習いたいと、親に無理を言いつて、

雨戸を叩き、まるで数人の荒くれどもが押し入る
うとするかのような、けたたましい音を立てた。
それは弥一郎の思考をさえぎった。いまの弥一郎
にとつて、その風は救いだった。脳裏に浮かんだ
記憶に、押しつぶされそうになっていたからであ
る。弥一郎は眼に加えた力を緩め、首を傾げて
戸口の方を見た。外で吹き荒れる風が目に見える
ようだった。

〈師範代は無論のこと、あの元気のよい百姓
町人どもも、今日は道場に寄りつくまい〉

古い米倉を改造してもらったものだという。自分
は道場主に収まり、城下の戸田流道場師範の名
を借りて名目上の師範とし、その高弟の桧垣
虎ノ助という者を師範代に招き、百姓や町人な
どと一緒に気の向いたときに汗を流している。

しかし、このところ剣術にも飽きたのか、稽古
を怠りがちである。師範代のほうも、それに対し
てあまり厳しいことを言わず、適当にあしらって
いるようだ。指南料は季節毎、というおおざっぱ
な取り決めだから、門人への稽古にも手を抜いて

休むことが多い。それで、時折、弥一郎の懐にも幾ばくかの金が転がり込むというわけなのだから、彼としては感謝しなければならぬはずである。

だが、当の本人は、そのように安直には考えていない。道場主が、いいかげんだからといって、それに合わせるかのような生半可な剣の指導は許せない、と思っている。かつて他藩にあって、鬱屈した思いを剣に注ぎ込み、かなりの練達を得ただけに、師範代のやりようには齒軋りしている。技量

道場に引き入れられ、竹刀を握らされるはめになつた。ところが、周囲の予想に反して互角に打ちあつたのを、居合わせた道場主が気に入ら、あとで宿泊先の木賃宿に連絡をつけてきた。そんなことがあつて、しばらくこの地に落ち着いてみることにしたのである。

腕はあつても、弥一郎は剣客としては無名の他国者。仕官をしていないから勿論肩書きなどない。相手は、いまをときめく戸田流道場の高弟で、れつきとした扶持取りである。当然処遇に差が生じる。

の優れる自分が一時凌ぎの雇われ師範代でしかない、という不満が胸にくすぶっているということも大いにある。

数カ月前、往來の砂埃で袴の裾を汚した弥一郎が、たまたま道場の小窓から中を覗き込み、門人に指導している師範代の太刀筋を眺めて、誰に言うともなくつぶやいた。

「いまのは斬れとらんなあ」
それを聞きとがめられた。罵倒は許さんと、

弥一郎にしてみれば、竹刀剣術でこそ勝敗はつかなくつたが、木刀か真剣をもってすれば、自分のほうが数段技量が上だとの自負がある。それは彼の修めた直心流という剣術の流儀と無縁ではない。

慶安年間に始まった神谷文左衛門尉伝心齋を劍祖とする直心流は、通常の稽古では竹刀を用いてするものの、一打ちごとに、真剣であればどうであつたか、と絶えず吟味する実戦本位の剣法であつた。

弥一郎はそのときの立ち合いを一劍一劍顧み

たあと、己の技のはるかに優っているのを確信するに至った。名門戸田流の高弟といってもこの程度か、という侮りの気持ちとともに己の剣技への自信を深めたのである。

直心流は他流試合にも積極的で、試合に臨んでは、練習のときと違って木剣をもって立ち合うのを常としている。剣の修行を積んだ者がこれを用いれば、真剣に劣らない殺傷力を持つ。

「あのととき、木刀を持たせてくれていれば……」
自己の境涯に負い目を感じている弥一郎が悔

が遠くを見るようにうつろになった。

三

八年前、風間弥一郎は、丹波亀山藩五万石で普請組に勤めていた。風間家は家禄三十石。武士の中では下級に属し、職掌上の身分も高くない。だが、それは弥一郎のせいではない。風間家は大きな実績も残さなかったが、また失態もしなかった。祖父の代から受け継いできたものである。

父は、弥一郎の元服後、数年にして病没してい

やんだのも、無理からぬ話である。

風が再び勢いを増し、唸りを上げて戸口を叩いた。雨も降り始めたようだ。小砂でも撒き散らすような音が聞こえている。押し入った隙間風が簾を吹き上げ、傍らに置いてあった苗を土間に転げ落とした。弥一郎は慌てて身体を起こし、それを拾い上げて土を払った。

「甘蔗か……」
いまや否応なしに、胸にくつきりと蘇ってきた記憶と対面しないわけにはいなくなった。目の

以後、弥一郎は、四十近い母と二つ違いの弟の彦次郎を支えていかなければならなかった。

母は彦次郎を溺愛していた。

「この子は私に似ている」

満面の笑みをたたえながら、誰彼の区別なく、人前でそう言うてはばからなかった。その反面、弥一郎のほうは父親に似て小心で面白おかしくもない、と疎んじていた。亡くなった父と母の間には、苦しい家計のやりくりから毎日のように諍いが絶えなかったが、そのたびにおとなしい父が

言い負かされ、内職にしている鈴虫の箱の上に屈み込んで、寂しそうな背中を見せていた。

弥一郎が幼い頃より、母は、家督を弟の

彦次郎に継がせたいと考えていたようである。

彦次郎は、母の言動からそのことを知っていて、

物心ついた時分からまるで風間家の嫡子である

かのように振るまい、何かにつけて弥一郎を差し

置くところがあった。

いつかは、この家を出なければならぬはめになるだろう。弥一郎にはそんな予感があった。自分

はそのときどうやって暮らしを立ててゆけばよい

のか。不安に苛まれて、幼い胸は張り裂けそうだった。

そんなとき、いつものように剣術の道場で年少組の練習を終えたあと、井戸端で身体を拭いていると、裏口から顔を覗かせた次席に声をかけられた。

「おまえには天分がある。どうだ。本気で剣術に打ち込んでみないか」

それ以来、そのときの言葉が、弥一郎の心の支えとなった。彼は、全ての苦悩を忘れようとしても

するかのように、剣の修行に励んだ。家の内での

鬱屈した思いが深くなればなるほど、弥一郎の

太刀筋が鋭くなった。そのかいあって、わずかの

年月のうちに教授陣が目を見張るほどの格段の

進歩を遂げ、十七歳のときには、師範からさえ

三本に一本は取れるようになった。師範は、彼の

剣技の目覚ましい上達を喜び、かつて自分が学

んだ姫路城下の道場で修行することを勧められた。ま

〈剣で身を立てよう〉

息子が急死したという事情があり、父の人柄のよさが幸いしたらしい。彦次郎は、天から降って湧

いたような幸運に嬉々として、風間家を相続することへの執着など忘れたかのように飛びついた。母も自分の先行きを子供の前途に重ね見るのか、その喜びようは尋常ではなかった。

両家の間の話し合いがまとまってほどなくして、父が、勤番中にひいた風邪が原因であつたが、彦次郎は当てにならない。高家に婿入りする喜びに心ここになく、空を見上げては、口も

弟の婚姻という、二つの大きな行事を終えたあと、弥一郎はつくづく疲れを覚えていた。

(以上1月28日放送分)

とに薄ら笑いを浮かべているばかりだったのである。

法要が終わるのを待ちきれないように、彦次郎は藤堂家に婿に入つていった。先方では、喪が明けただばかりだからもう少し待つてもよい、との話だったが、彦次郎がそのような斟酌には及ばないと答えて、できるだけ早い期日を希望したのである。相手方への挨拶や引き出物等、儀礼にのっとりたこまごまとしたことを、伺いを立てながらも全て取りしきつたのは弥一郎である。父の法要と